本因妙を強調する下種論の初めである。因みに日蓮聖人は証真の『私記』を閲読しており、『注法華経』にも引用が見られるが、この箇所の引用は無い。つまり、本因妙下種論（本因時に拘わる下種論）は聖人以前に既に日本天台内に存在しており、聖人の眼にも触れていた。しかし聖人は所謂「本因本果の法門」、三十三字段・四十五字段等を説かれる際、これを用いられなかった。しかし、日蓮教団が拡張・分裂していく過程の中で様々な展開を見るに至ったと言えよう。尚、この問題は更なる検討を要するであろう。

日蓮聖人の法華経引用について

三輪是法

本研究の課題は、鎌倉時代を生き、法華経を信仰された日蓮聖人と道元禅師の法華経観の独自性を、経文引用と解釈という共通項目の比較検討によって知ろうとするものである。そこでまず、法華経観を窺う前段階として経典観の特質を参究すると、既に明確な差異が存在していることが理解される。日蓮聖人の経典観の特徴は、釈尊の教えを文字として表記した絶対的存在と見ることであり、道元禅師のそれは、経典と成る以前の真理と等位に見るというものである。このような違いは、経典を「観」ずる「眼」に起因している。

道元禅師の眼は、『正法眼蔵』中、「眼睛」という語句によって特別な意味をもって表現されている。眼睛とは、仏祖、経典、日常の修行に従って、自己がとらわれる常識的認識を脱落し、脱落したその時に、絶対化する眼である。つまり、現実世界が自由に、自己の規定下において知見可能となる。その結果、道元禅師が説く無分別に認識された「経巻」は、現前の現象・事象として、仏祖として、仏祖としての自己として、更に真理の法として顕現するのである。

日蓮聖人の眼は、観普賢経中に見られる「五眼」に依拠し、法華経との関連によって説示されている。つまり、法華経を「持つ」ことによって、法華経が具有する仏種を備えた時に「仏眼」となる五眼（肉眼・天眼・慧眼・法眼・仏眼）なのである。法華経を「持つ」ということは、色読という信仰形態で法華経に信順するということ

で、法華経に身を投じ、法華経の世界に生きるという絶対的到達点から生じる眼なのである。この仏眼は、凡夫の肉眼が五眼の力用を備えた眼であり、肉眼即仏眼となる眼である。更に、明鏡である、法華経という仏の未来記に写映して現実世界を見る、自己を内省的に否定する眼であり、常に現実へと還帰し、一切衆生の救済を実現する眼なのである。

道元禅師の「眼睛」と日蓮聖人の「仏眼」は、共に自己を否定するところに開眼する眼である。違いとしては、前者が自己の常識的認識を否定するところに生じるのに対して、後者は自己の主体的認識を否定したところに開くといった、対照的な力用が指摘できる。つまり、道元禅師は常識を脱落した「眼睛」によって、現実を無秩序化し、その現実の中に秩序化以前の真理を覚知するのに対して、日蓮聖人は、現実を法華経に映し出された未来記として受け止める「仏眼」によって、現実を現実のまま、仏の本意である法華経が開顕する世界、仏界であると覚知されたのである。

日蓮聖人にみる
病相の提示と治病

野口真澄

日蓮聖人は、檀越の病や疫病という実際の病をきっかけに、時には医療による治病をすすめ、あるいは仏天に加護を祈っているが、一貫して説かれているのは法華経による治病である。その教導は、既に指摘されているように（渡邊宝陽稿「日蓮の教説における個の病と時代の病」宗教研究四九巻三輯所収）、「謗法の病」を治するという目的が根底にすえられている。本発表では、こうした教導がどのようになされたか、その一端を探ろうとするものである。

疫病流行の報を受けて富木・四条両氏に送られた弘安元年六月二十六日付の二通の消息（異称『治病鈔』、『二病鈔』）では、ともに「夫人に二病あり」との冒頭につづき、人には「身の病」（四百四病）と「心の病」（三毒八万四千の病）があると、病を総括して提示されている。このうち「身の病」については「治水、流水」